838
12
87

国立国会図書館　　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用

家忠日記追加巻之十一　自天正十八年六月
天正十八年庚寅　至同年六月

根岸信輔氏寄贈

書山文庫

帝國圖書館 昭和四十八年

三日　台徳院殿駿府之御城ヨリ遠江法吉ヲ取リ之井伊直政法井忠世内藤正成青山忠成等供奉次

十二日　台徳院殿御入洛秀吉長束大蔵大輔正家ヲ以テ旅中之労ヲ問ヒ奉ラル

十四日　大神君之御葬　秀吉之称南日院ト号ス

春秋四十八歳

十五日　台徳院殿御旅服ヲ更ラル是ヨリ御城ヨリ登リ之御井

忠世御膳物を設け井伊直政酒藤正成青山忠成御傍に
有り秀吉大に悦て出て　台徳院殿に謁見ありて秀吉
侍女を呼て　台徳院殿の御ふところより　吉　台徳院殿と見て能く生長ましませり悦ばれた髪様
衣様を切捨給ひ干時大政所手ずから其髪を結ひ
御衣服改め御肩衣袴を更めさせ秀吉金龍の大小刀
と出して之を帯せしむ即御手を執て本座に出て直
政に謁して云く我子　台徳院殿の男舎弟と成て本様と
改て如　永康之と見給ひて驚き喜ひ給ふ　台徳院殿
未幼弱ましますと雖吾之を留るに忍ざる早く供奉して
騎列に成るべし　台徳院殿暇を告て退出ましますの時
秀吉甚臣哭に黄金唐服を与ふ
十七日　台徳院殿洛を出ずして御帰国に赴ふ
廿一日　大神君北条氏　御征伐として駿河小田原に陣
登向ましまし門上有法御渡府に至て馳集るの
旨を触催さる
廿五日　台徳院殿洛ましまし駿府に帰り来　大神君
の旨秀吉　台徳院殿を洛に留めらるる事　追日相列に
軍を発すべきの時吾領内の地を仮んとすべきを
本多作渡守重次に　命て通

路の沽券と掃除場とし外の屋敷如く三日と経ざるの後秀吉書と出て地を假人と
清水大神宮領とし給ふ

二月大

二日　松平主殿介忠吉と卒して参列深溝の地を
発して駿府に赴く

廿日　大神宮相州御進発の軍令と下し給ふ
一筆啓上仕候其後は久々ご無沙汰仕候
一先年と其節今こうまわりて事済こうまで書み
候事感心仕候

一毎年初穂と備へ来る所於有なる
実多人数実俵と云ふ事ハ但風前於有之
うわなりて可通事

一人数押時服弐領ゟ弐拾領ゟ弐拾五領ゟ弐拾五領ゟ
様に通数ゟ有て其ゟ多人数ゟ
一諸役実行人の苦労と今後
一人数押ハ小旗鉄炮ゟ通筒ゟ
押様ゟ押方ゟ可為事
一押強ゟ軍役ゟ外ゟ多ゟ長柄ゟ
停止但長柄ゟ人馬ゟ

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

一小荷駄押し事兼而ニ而ハ無之候得共
緊ニ申付差遣ス事ニ候ハヽ軍勢小荷駄
一無事初而當地ニ到着之上ハ諸
者共ニ至迄ハ勿論自然ニ御国其
如何ニ而ハ没事消滅候ハヽ無
候大事
一諸高貴押賃銀籾等ニ於遠方ハ
ニ而御取事
一兵粮ハ於今津押ニ而ハ無
右ハヽ遠方ハ門(日カ)前中大小神祇ニ
候ハヽ遠慮ニ歩ニ

二月拾六日 天正十八年

五日 松平主殿助忠後府に至り 懇ニ
謁次手時家忠笑顔の 命と奉
て後府と発し江尻に泊る
六日 甚雨に依て此日 大神宮の御進発延引事
十日 大神宮師を助て後府ニ
等御此日家忠出此に陣次
十六日 大神宮伊奈熊蔵忠政 後に統後
守と号次と号て富士
川に船橋と渡せられ 御出と
命せらるゝ 御

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

奉て皇を監沢一

廿一日 富士川の私橋成る 此日北畠信雄後府に到る

二十四日 大神宮中久保に御陣吐生之瀧ハ進て沼津辺に陣沢

廿六日 秀吉と饗宴数献あり 大神宮御頓国の中に先日より 命有て暇せし処の人々 此日御ゆるしの旨奉行人より告沢 沼津進沢

三月

一日 秀吉の先陣京都を発沢 五畿南海山陰山陽北陸の兵十七万余騎伊勢尾張二列信雄の云一万余騎 濃信雄後河遠江参河五箇国 大神宮の云五万余騎 尤秀吉ハ沼津出張沢 着と云云 後陣ハ美濃尾張の間に 充満て秀吉関東発向の前日参内して節刀を賜る 此日秀吉給也と称して 東河哥を真河まで秀吉毛利大馬沢雑兵東海の整衛と沢其云四万余騎 内して節刀を頂すると百騎の建

八日 大神宮明後十日迄に表に云衆発ちるの 旨沼津に 命せりる

十日 秀吉秀次吉田に至る 八日より雨降

十一日　秀吉吉田次右衛門を以て
態藏吾に書を北地に留り雨の晴るゝを待て
軍を出すべきの旨を告ぐ秀吉のこゝに吾同く軍行に前に
在て雨澤りを冒して渉ることを止めんことを吾と止まるべきを
渉水放に吾今日を渉んとす泄行うべき
態藏のこゝに前に有て雨降るの
可也大澤を渉らは云多く溺るゝ
大に甚言を發して此に留るの事二
十四日　秀吉近日後別に今なのは甚
て大神宮秀吉の陣營と吉永に
主殿助永忠　命を奉て來と監沢
十九日　今日秀吉後府に着を次手
府窩に秀吉の耳に告てこゝく　大神
通して異心あるの由を告るを以て
檜篠して後府の物に不入海野淳正長政北事全く
虛説の旨を強て陳し放に秀吉殺心頓に敢して遂に
駿府の物は今か此日秀吉宇津山に
民情果及び馬の歩を捧て秀吉
秀吉彼まり志の感して則着すべ
並黄金と彼の御民にあ

石田治部少輔三
奉行秀吉志を
て秀吉暫時
政北事全く
して遂に
前の時
吉兆と賀ス
前の烟服表紙子
紅奢

十日 昨日秀吉後方に着くに依て 大神君今日後方
の御よ渡河秀吉に御對顔あり
十二日 大神君中久保に歸りたまふ
十三日 秀吉清見寺に至りかの忠告所にして秀吉に
謁見次
十七日 秀吉沼津の驛に着く
是より家康北条氏政と直父子秀吉の軍と出沢と同
て云と分て沼津を守り給ふ已に小田原の城と深守するの意
後て小田原の城と深守するの意北條新左衛門姓高
原伊勢伊賀伊中守同姓伊後守左衛門尉
福嶋加賀入道乙巻勘解由左衛門尉南條小源守南條左
京亮菅南條民部少輔南條左馬介小西隼人正富永内
膳正大藤左源門依田大膳亮菅沢荒川豊後守大森宮内
守清水右京亮左源門依田大膳亮菅沢荒川豊後守大森宮内
伊中守同姓玄部少輔同姓孫玄衛尉相馬次郎上田常
陸介芳賀伊勢守同姓伯耆守伊藤右馬介朝倉右京
亮内藤左近亮大沢式部左少輔原豊前守荒木玄蕃
尉内藤大和守安中左近將監三浦志摩守長尾信濃守長尾但馬
守大内宮内少輔佐倉羽田市川長南高井小幡等却て
其玄四万余騎

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

山中之城に松田云衛尉秀良佐守之
秀良勝間宮豊前守好高朝倉能登守ト
らしむ民政此三人ト為シテ右清衛尉秀良刀(吉国)
に刀能登守に服指ト授テ謂テ云く諸ト
為セ好高ト云く君心ト労すること
追ら付我必次戦い死ん朝倉能登守返テ人ト語テ云く
小隊ノ滅亡甚ら必次遠ら沢山中之城ハ要害太タ
深也ト雖守テ大ニ旨ト振ふに足ラ
三四人ト為テ旨ト守ら之則旨旧臣ト為ル也嗚呼悲
哉小隊ノ亡人ト為ル吾必次秀吉ノ大ニ敵テ死
ん欲次
民政北隊表濃守ト並山之城ト
箱根宮ノ嘗ハ松田尾張守憲秀上田上野介朝廣に
安房上総二州之兵ト加テ一万三千余騎ト為テ旨ト為
らしむ湯本ハ千葉前介ノ軍勢八千余騎ト以テ旨
ト守ラ千葉国潮卒ニ(ママ)テ甚ダ
武部大輔新介ノ為ニ代ラシテ旨ト統ベ
竹沼ハ北条安房守氏輝ノ旨ト為テ旨ト固ク心
総守主生上総介甚ダ一万五千余
廿八日 秀吉山中表ヲ巡見セんノ
てに中久保ノ御ト至テ軍ノ法ト
大神ヲ祈テ

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87
ガラス使用

夜に入成之刻に及て沼津より駿之
盡せし処其虚實を探て軍列を定め時剋を
早にあの福原大馬介と云て沼
御方を攻撃んと欲次大神宮の
山中に至り御方を経て小田原口に押向ハ
し処あの小富信雄の軍勢なく幡濃河波守
忠政福鳥左衛門尉三則長岡越中守忠興生駒
淨安氏郎中川藤左衛門秀政本多出雲守忠政戸
田民部少輔小笠山の御方軍と為
し処あの中納言秀次と大将と
田中吉政少輔長正堀尾帯刀吉晴山内對馬守一豊一柳
伊豆守市正等其勢五万余騎小田
撃一ツ堀左衛門督秀政木村常陸介毋衣五郎左衛門
尉長秀長谷川藤五郎等八山中の御方の南方に廻て淀谷
を攻険難の処を攀登へたの
告しを
十九日前夜實之刻に及て山中の御方の言々を津波
軍と発次今日巳刻に至て大将毛江中納言秀次山
中之御方より千余町を隔て津を張る秀次高岑に登
御方を臨見て中村式部少輔一氏を招ていく我り津波

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

御よ遣し～迫く津と攻寄んと欲せ仕張とて地利の
要害とて沼しかれの実況不知沢一氏甚容赦奉て後
士濱辺高名清とて仕張よ参りしに干時海色潮
てさく沼御の要害堅固より沼坂て昇時よ扱く成
ありけ既に暁未て告ぬに五ツ沼くくて無らは速よ軍と急ぎて
甚納と定て海辺御をくくもて見ぬに遠く見た
暫て沼御の要害堅固より次干時海色納のごく後
軍と招くく氏速に攻進しなかる事八町余り渡辺又
使と地て名御を攻撃ん事と告ぬ一氏色と許と決

剤止すり公氏海辺不聽進んて御よ攻今分一氏の軍士
藪内匠助色に次て御よ今か成寄半ば満門尉高屋知
分坂井云右衛門尉吉田式右衛門尉ホ共に進む一柳伊
豆守忠ホ先登に進て遂に乱沢沼御の守将
用宮豊前守高辛を指揮て矢色急ぎ炮と発して
色ホ振く青木新右衛門御よ御ホ手に廻て苦戦て首級と得ぬ青木色と本陣に持
来て秀吉の実検に今か色今日の家抽の首色事指若
しと悦て秀吉金銭の貫首と取て青木よ授く用宮好
高刀と指よて振ホと云一氏宣ぬの実歟と敬い成ぬ

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

の用好（本ノマヽ）高に加り洲俶と守る所の集り防拒く事と
洋次当離散次第高橋拒ち戦て遂に自殺次第其
官式部少輔周之助才多父子三人と称して従る百余人
当銭松次中村与云利と集て進て三ノ丸と破る所松條
氏及山中の俶の軍と囲て其雌雄を決んと欲し山上小田原
勇剛と仆倒して山中の俶は遁しし山上小田原と発
して山中に赴く　大神宮の与木出
路と奪次其道狭〆僅与一騎兼り行く其軍防連続する所
行程長途にして木の用陳ふに駑鈍し又南の方り金に
当て長谷川藤五多木村常陸介堀方兵門督り軍勢

山中に充満次山上遠く望見て敵の多寡必次今一度進
て小田原に反事多かへ山中の俶の安否聞くに及ん次
速に跋て急ぎ告んと欲して小田原に返次二時山中の
俶雲霞の如く多勢次依て小田原に告ん事を見て
敵既に俶と棄て小田原に出奔次速に俶中に反入り退き
後れる残黨等次一人を浅サ次計捕へ来て十五年
と指揮して勇と励次方辛苦風に向と奮し伍と乱て
俶中に反入る俶与拒く事多ノ次或ハ我死し或ハ自殺次
俶に先る者少し皆午之刻より山中の俶逆に強る俶与戦
死する者本田右京亮（ママ）太夫池田民部太夫（ママ）推津集人正伝藤

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

左馬頭同姓源次郎山岡左
京亮主計大膳亮富田豊後守
百余人当社次郷将北条左馬
死んで本郷を追て暫く時を移次官
の倉庫に入て財宝を奪い事よ吏士
民勝僅に郷を免る一郷も隠匿一日既よ暮て先鋒よ迷
民勝進退決失て自殺せんて欲
木村三河守伝内日向守等を剪
要害よ在て敵を拒く事能ハ次
当命を捨次将棋郷と戦ま出て
郷よ再び取り入らんて皆必死取て民勝と始て一旗役士十人
皆髪を薙て耳縄の郷よ今く塾居次小田原の城築
五代達績して多年修すか処の要害堅固也殊に以て
東海道第一の箱根山の険難を前よ富て東国の群士
競い集て皆を拒き守るかたい事百方のごの如て
皆必次すて容易く郷と抜んか事難しと民次直嘉
言い吐く処よ山中の郷陥るか
小田原の郷中大ひよ恐る

四月大

一日　大神宮の玄松平周防守康官位野口の里進て宮

懸野に登り北条の陣と取合前を斬
依て宮懸野湯本竹の浦三ヶ所と守る北条軍士等
皆根懸にて小田原へ逃入る
二日 大神宮久世三四局坂部三十局と召て宮根山の斥候
として進て宮根を津しむ宮に依て秀次及び上方の
諸将等各宮根迫辺に津を張(不)
廿日 大神宮蔵ヶ浦(ヒ)に於て戸田忠次と召て
御膳を賜(ハ)る今日殿と奉る
に依て北再拝を以て士卒を指揮次第これの旨 勅命と蒙
三日 大神宮の会小田原へ到て宮根山の麓に津次

北条家の旧臣松田尾張守憲秀の嫡子笠原新八郎
(笠原の姜を次ぐ故姓を改む)と云者両里先より伊豆国戸倉の城よ
在て小條を逆て志を武田勝頼へ通じ戸倉の城
甲斐の云ひ込入を小田原の城と諸人と欲次不忠に
得故甲斐小平と勢を以て攻入る笠原又志を変て
已の城よ引入れ甲斐の兵を数て海をたて再び小
條よ属人と欲を小條曼を悪て笠原と小田原の城
招て既に降伏せんとする彼を又狙松田尾
張門前を次第に小條家の忠臣共悉く其切に依て
死罪を赦て笠原髪を薙て小田原を立尾張守

憲秀の嫂北河村之卿と云る国侍に嫁せしが秀吉軍と小田原に
発せしと聞て当家の窮よ士心を通じ一束囲の仁道を秀吉に
清よ秀吉悦て曽て許せし当家父尾張守憲秀に此隠
謀を語る憲秀是に諾して秀吉に通じ氏政氏直
憲秀の隠謀を知らず
是より秀吉氏政氏直憲秀及び家臣等を招て軍の謀を議
次日諸将を会して云く敵の大津以に箱根山を越て小田原の境
近く進む我等をして畑名橋辺に越さしめ敵険難の地を
越て来る時へに乗じて急に之を討て中に雌雄を争ひ
当家の安否を定んと謀る千時雲田憲秀云く敵山
中の城を抜て甚々盛んにして勇に進む味方の兵心中
の城の没落を聞て大に恐れて勇力を尽さん然るに今
吾が弱兵を以て強敵に向ひ戦ん事覚束なし
似ず重臣大半長尾景虎武田信玄の時亡失大聖院殿謀を廻し
ず次安害を後にして堅く拒ん守る是に因て敵の云
数日の在陣に糧乏しく乱妨を企て軍を退ん敗人々
欲せん千時城中より勇兵を出して是を追ひ討ん敵根模
を一離散次味方の兵大に利を得ん儀固の敵なからん如
此次や是西囲中囲の兵長途の津に頓て糧尽き疲

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

勞し雪力裏へん亥掌を指し如〳〵甚時を寵し溝く
擊に乗して敵を討ん事石をも
んと甚汁略言を尽を次北條父子
を又北溝よ後ふ
八日 夜に入り山城守と廣照寵よ小田原の城とを
大神宮を憑んて降ふ
九日 大神宮の告小田原城を囲し子時城中よ
矢を発し火炮を飛して皆を担く安部左馬介九吉
進て鉄炮に中り疵を蒙ふ
松田尾張守寵よ使を秀吉の陣を遣し詣て云く小

田原の城西南の両よ當て峯谷云ふり色険難の
地完竟の要害ふ事ふ此山ふ城中真下に見へ城
ふ容易く便りふを攻て地利也箇根山の北方に撫夫の
通不道ある事寵よ軍勢をして此ふ参らあ
ず以て本陣と定らるへし甚後時急を寵ん事朝
に内通せいふの上と達次秀吉ふ焼て使者を賞て
禄を与へ今度当城落去の事一偏よ雪日ら溝く候
猶内應疎ふ成へくらまふの旨を返答して秀吉頓て
仮を彼の山よ遣して甚地利を見せ此山雪日ら
ふに遣次秀吉軽く湯本の真光寺に止〳〵軍沿と

登るに〳〵矢松柏生い茂るか間より陣営を俯
〳〵櫓を高〳〵白紙を以て城壁を包むの万小田原の
城中より遠く見ゆる迄白壁に違次改よ宣威て後出
津宣と雖松柏を悉く伐らし心ひ
城く善掛心の間月に思ひか城中の玄旨を見大に
驚き一夜の中に津宣を喚〳〵辞を厚く事最を
言ひ甲を遣〳〵秀吉ハ天慶の化現ありへしと
城を守恐懼を
秀吉 大神君と参るの津宣に招請して芸に
なよ登て 大神君よ造て云く敵吾ら日の下にあり
小田原の城の滅亡唯今に始まる吾必次関東八州を
以て 大神君よを納む
前田利家其子利長師を卸て別を表し本曽路を経て
東国よ参ら上杉景勝毛利河内守未同く軍を発と
其二万五千余騎上州松枝の城を囲て攻討て敵を城
主大道寺政繁河守政繁其子新次郎を固く拒む
小国の大城と雖て敵て出て次城を攻む大軍等ハ拒ハ
十日 利長(家)勇猛なる松枝の城を攻落し利家(家)
津を浄を浄を利家(家)よ先て城を守り通け渡〳〵利家(家)
大駆の兵に加ら後河守政繁う四代の祖ハ江刕の人也

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87
ガラス使用

小篠軍雲と共に関東に下りて甚功を成し小田原の城を
草創せらる七人の甚被故に今此列に座るに以無勲利家景勝おう会に加り秀吉城の
と避け後利家の先陣つとめ
御輿をかく
十一日 利家会稽して松山の城を囲むに上田上野介
居城をまもる上田小田原の城よ在て甚臣難波田
周防守本多子丹波守金子紀伊
和泉守等を城に留て守らしむ利家景勝松枝の浄
人をもて案内者として攻て城を抜んと欲を
松山の城を攻落し利家よ先陣を遂け深
利家の兵次第を城を三ノ丸迄乗入利家よ
等の軍勢悉方浄を以て小田原の城を囲むと云
東国の名城なれば小田原の城容易く
落と干時大神宮を信雄志を一ツにして城よ内通
かゝるの由若汝逃くにして陣中騒起て静かる
十五日 秀吉陣中の法度を固て
辛して 大神宮ない信雄の両宮に入く各半日
彼二宮に於て祈日を暮を乞ふ事を許
十九日 利家景勝兵を率して小篠安房守氏郷

居城掃部の城を囲む沼口の城を攻
守る扶投斎よの多勢を囲みて其勝ちうるの事
慮て困窮に迫り降を乞ひ甚雪力衰ふるに似く
後雖悔恥あるも未軍を締ひ
以前に所詮降をもて利あ
の降人雑波田不言子等をもて些
城を沈めと搦候降をもて
城をと搦のんもて城中和せ
事を降をと城下の青竜寺まで
ゐく途よ掃部の城を囲み降を
当利家に降て城を捨て逃げ落
野介是を守るよう人々東国の数城皆利家に降
家て清水急に雪力為して城を棄て逃電洗
廿一日北條左京門亮氏勝没
の御津営に参候し　大神君
に至く則ち吉に謁
山中の城浸(落)して後氏勝僅に免
ありなり特兵数氏也栗田の某を使として謁ていく
山中の城降ふ事多く氏勝ら兵雪の延らさるを
ありをも降ふの武運頑くに候ても氏勝再い田

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

處の御ふり入て歎を拒て軍忠を励ましむ然りといへ共民勝山中の城を攻て去年と亂て耳鏁の城を守て戦死を遂て初の忠を雪人を殺して民勝の旨に應ず沢栗田小田原の城を攻て潤てえく民勝志と秀吉に通ずるに依て使の旨に依てとのほと謀を景こる民政民勝と謀ての心得起る故に民勝悔憤て猶此城を攻後に名義を顕んと決ぬ民勝小達弁　大神君の知り玉ふ故かくの如く依て郡築治た遠の府相事三郎右衛門尉を遣使として　命かりて曰く條り領國國家の

敵城当表に浄て御を遣け渡さに迫る又此城の落去日を経ずと今敵よ小田原一城前に海陸に吾陣より来て勇吉に浄ら付我勇吉に浄て足下の命を敵ん二候（使）此御旨と民勝よ従く降忠死を決て　命に従りと　大神君桐原康政井伊直政として耳鏁の城よ取り巻て其命二度に乃い民勝遂に　御城を降退け渡沢

廿二日　関東の諸城皆落味方に属して退け添と先に依て　大神君の撰使として戸田三郎右衛門尉忠

次として江戸の御よ取しめ奥州
津軽の再波守真田隠波守に江戸の
うち二人御書に依て名義と励ん
十六日大神宮の臣本多中務大輔忠勝其子本多
平八郎忠政勇名活門勇之丞平岩主計頭親
吉植村土佐守秦忠秀吉の臣浅野弾正長政其子
浅野左京亮幸長木村常陸介等一万余騎
と率て武州岩付の御よ取
野州佐野の御、北條氏忠う居御
在て家臣等として佐野を守
史佐野の御、其の物佐野豊後守綱
領内豊岡と云御あり里長尾照長頃
年攻て此御と抜んと競ふ天正十二年臘月晦日夜ニ入
照長公と不意に起り攻て豊岡の御と取る宗綱之末
血気の勇者るに依て是と固て大に怒り翌三日ニ
十二年の朝旦佐野の御と奪て豊岡に宗綱
後ろと率せ従に舎人栗田の某一人と携へ豊岡の
御よ駆向ふ照長兵士と櫓に登て矢と発し炮と発ス
某矢宗綱ノ左の腕よ中て忽ち馬より落つ舎人
栗田モ物けく漸く御ふ二町余を去ら御之木戸

と雖て進く出ると追討く遂よ宗綱
嗣子ろ丸を伴く佐野の舘よ脱ん
旧臣大貫越中守竹沢源二郎津布久駿河守山上紀
濃守飯塚出部少輔高瀬紀伊守小見小四郎赤見と相
議して云く當時関東列にて北條家の武威強大
也彼一族を滅て宗綱の女を以て
嗣と成んしと衆議一決して旧臣各佐野家に對
して未代に及て野心なく忠切を可尽の旨連署の起
請文をかいて当主に同意沢蔵ろ前よ宗綱ろ父い
ろ昌綱ろ菩提ろ為天徳寺ろ住僧ろ事を兼て志ろと佐野ろ遺
旧臣等ろ旨ろ後ろを佐竹ろ氏族ろ佐野ろ遺跡を
継ろしめんと強て諫諍すろ雖ろ氏忠を信て佐野ろ家と継しむ天
遂に小像氏政ろ庶弟氏忠を信て佐野ろ家と継しむ天
連寺殿伝奏ろ事を棄て海よ急り黒谷よ山居沢今慶
秀吉京都と奪ろ物彼僧黒谷よ山居を
攀て東国ろ案内者ろ事を秀吉彼僧を
佐野に遣し佐野家臣ホと謀しむ臣等ろ旨を落して
天連寺に依つ夫勇士ろ道義
と守り二心ろ忘て本意と決其初天徳寺と称て
氏忠に属し其臣と為て城を守ろ今又志を変して

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87
ガラス使用

天誅孝よ二属は一生両意決すと云て敵
色に従ふと佐野の本城と堅く守て忠死を遂んと欲
ふよ依て其余の臣等天誅孝と守こして大勢を
攻討ツ大要戦ふよ及と命ハ義よ依て降ふと大よ咤て
遂より教と佐野の城臣等天誅孝と例て佐野の城
主と云ふよ依て佐野の城乗秀吉に属と

五月大

上野國西牧の城ハ多目周防守大谷帯刀清門厨
色と守ふ松平後藤孝名本多忠勝芦田兵と纂して攻て西牧
の城を抜ク城将多目大谷と始て城兵悉く討取り
進て国國石舎の城と攻んと欲ふ城将清を見て石舎の
城を避け渡と後藤孝城をを取り石舎に来書次石舎
謀て後藤孝と刺教と後藤孝ハ平新六郎
又石舎と教と石舎ハ従兵ハ新六郎と競い攻し新
六郎勇と震い術をを尽して苦戦一悉く急と討敗
新六郎未若年にして抜群の武勇と震よ
大神実大よ色と美称りて則後藤孝の遺蹟と以て
新六郎よ場二子時大神実御書と新六郎よ下ス
後藤孝義之事ハ新六郎ニ十分候人数等
石数指置可申候猶期後日候恐惶謹言

但馬守一色廻兵

十一日　永禄

松平新六高政

十五日　大神宮の兵進て小田原の城遠中の築地を海を

後也

十八日　不野(総)国鎌の城海ふ

宮内木曽永次として兵を落せ

十九日　宮内の軍勢宮台の城を囲し出城を奪ふ十余民

房(氏政二男)り地氏房者小田原の城を在て甚臣伊達

ら清厚(成)てお城を守ふ外妹尾下総守片岡

二八九

源右衛門として本城を守ふ外本多中務大輔

忠勝浅野弾正長政大久の部将ふ等皆高名

尉元忠平岩主計頭親吉榊原の某本加り和気を向ふ城会

向い囲し木村常陸介堀尾の

進て郭外に出張して拒敵

攻討城会根切し城よ取し

て追事大メと急也城会大久の門よ於て返し合て苦戦

此よ於て高久の兵命を捐し痛を蒙る者多し浅

野弾正長政大と城中に於て攻ふと云ふ城漏ると其

子浅野左京大夫幸長大久の門ノ橋の上に進て奮戦

秀居衣右衛門尉元忠隠居曲瀬に攻入り本郷と破んとて進む午時郷兵殺傷数拒く元忠り後士寺田善左衛門小田切又二宮左太夫等三十三人戦死沢又瘧と被る者七拾四人本多中務大蒲大夫の門と破り其子本多平八郎忠政（年時十六歳後に美濃守と号す）戈を把て奮戦い郷兵姉尾下総守と捕て其首を落す午時敦の矢忠政の簇乃前瘡より中る二浦監物忠政と共に進て戦死沢植村土佐守春忠団藤治右衛門尉永田角右衛門尉戦切と突沢鳥居元忠平岩親吉本多忠政各一所より集り進て士卒を指揮して勇と励ます本多忠勝り立い三宅羅

兵衛尉鉄砲九左衛門尉各旗頭忠勝り旗と本郷より桃人形梶金平鑓と合せ多門傳十郎山口加平次等能く戦て軍切歩す河合又五郎蜂須賀金右衛門尉小瘧と被る下里友八郎佐奈作右衛門尉江原市内長坂甚平小野新五郎等戦死沢郷将蜂尾忠政より討る片岡小瘧と扇ぶ其の余乃郷兵或ハ命と損し或ハ瘧と被り傷る者少々言ふ勝ち乗て競い攻ム

十日　岩付の郷兵力為死て拒く事と沒と伊達与兵衛尉浮と元ぶ本多忠勝浅野長政等議して元と許と大備長政郷と遣取り使と出陣に発して些忠と大神表ない秀吉に

告ル大神君其功ヲ表祢シ玉ヒ又秀吉其ノ敬ヲ厭ヒ
テ忠勝長政ノ両使ニ對シ腹汁仕ノ刀脇指ヲ与ル
廿四日 結城小田原ニ参ヲ秀吉ニ謁見況伊達宗実
養ノ為後ヲ遺況ノ列ヲ経ル小田原ニ来リ秀吉ニ
謁セントス正宗 午時二十四歳 髪ヲ秀吉ニ
云ク我ヲ大兵ヲ率ヒテ北條ヲ攻ム豈ニ依テ上杉景勝
佐竹義重聘使ヲ馳ヲ海松然ル次其侵ヒ取ル所ノ
会津仙道ノ速ニ返次ヘシ但シ米沢三十万石ハ元ノ如
領ス ヘシ若此旨ヲ背ハ早ク師ヲ旋シ玉ヒ汝ノ会津ニ至
ラハ必北条氏ヲ滅シ量テ軍ヲ会津ニ発セン安ク若テ
云テ曰ク死生ハ命ヲ聴ン況ヤ那邑ノ事其旨ニ従
テ会津仙道ヲ返ヘシヲ以テ暇ヲ若テ即小田原ヲ
去ル

六月小

五日夜ニ入大雨小田原ノ城中和田三浦ノ従兵百五十人役所ト
自焼シテ城ヲ出奔次
忍ノ城ハ成田下総守ノ居城成田ハ小田原ニ在テ酒巻
靱負助ヲシテ忍ノ城ヲ守ラシム石田治部少輔三成
計ヒノ如ヲ将テ佐竹宇津宮ノ兵ヲ加テ忍ノ城ヲ囲
テ攻討ヲ玄酒巻能ク拒ギ守テ城猶ヲ落ヲ

三長汝岩付の城を抜て後秀吉の旨を諾て忍の城の亭
よにかり石田と芸に城を囲し城よ
に通と長汝急を石田と汝とを石田同て此事城〻ハ長汝り
軍功るゝん事を知て長汝を謀と長汝内應の者
の約を定て軍を発して城を攻め行田口を破て進む石田
佐竹宇津宮放て兵を出さを急に依て長汝一旦行田口
を破ると雖後次の兵ら乱に依て城を捨く事と浮沢
軍を率て退く長汝ら後卒と雖内應の者百余人にあて
秀吉石筆山中山城守と云者かり連年成田下総
守と好交ふ秀吉山中を招て海成田と相知る事尚し
誠に一轉に遣し彼をして我に降らしむ山中自千
書を成田ら許ら遣し成田急を諾と山中成田ら回章
を持て秀吉に示と秀吉大に悦て成田ら書を竊に民
直に遣て謂て云く関東分列の数城皆志を我に通
次小田原の城途に破ん事進て氏直速に我軍門に
降ハ其命を赦ん氏直急を聞て後城中の諸士を謀
事屡起ら氏政氏直使をして成田を招く成田病称
して遅留を使三度になるとも云て天事ら氏政氏直
又醫師田村安栖を遣して云く海野心カりなの事我
急を聞く其實否と知んり為メ再三招と云て来らと

〕故甚驚愕止次成田答て云く敵の大兵忍の城を囲む
我も〻城中の士女を悉く殺次に忍を故山中山城守に
固て淨と秀吉にもし甚言聊を偽にあるとそ氏政
氏直大に怒そく成田り後詰の四方に柵を結て山上強右
衛門尉をして兵八千余人を加て急ぎ守らしむ
十四日 松田尾張守憲秀隠謀日意の一族後者共を
窺よ招て謂てそく小事も叛亡の期迫く迫る関左
八州の諸城当淨をそて秀吉に属と今僅に残る前い
忍原の地是當城の落去又旦夕を経ん次我等を慮に
依て降左衛門尉(又四郎カ)に因そく淨をそ秀吉にそ秀吉
して剰へ伊豆相模二州を以て我等に与へんと約次第明
十五日の夜に入り長岡忠興池田輝政両将忍原新六郎三郎松田弾正三
役所へ乗込城中に引入れんと決次秀吉其用意カりあ
れの旨を説く憲秀り嫡子笠原(憲秀カ賀)松田肥後守等当淨に諾と憲
秀り二男松田左馬介其容顔表裏にして心優に艶ら
是に依て氏直寵を渝りもして常に傍を離さ次
左馬介此旨を聞て淨てそく悲哉父の此心カり事
父公も此家景代の長臣として威八州に蓋冨秉海
に溢るに依て一族當其沢を蒙る故今大事り娘

〻
かりき今此時に至て二心あるを
尽次憲秀頻て大に怒ていわく此隠謀を企事我も祝
に齢傾て栄花の日なし豈全く身の為ならんや孫の
後栄を思ふ故也然るを汝其心を破る不孝の至
也左馬介此秋波を見て一旦宥て日を過さんが為メ偽て
憲秀の上旨に従ふ憲秀大に悦て左馬介謂て云
く明十五日八木城就日と謂て甚切成り難化の日なり
明後十六日に至るを待て迎引かりて宜しかるへしの旨
謀し憲秀是に落ると其夜左馬介身と鎧櫃に入替
て窃に本城へ往て氏直に謂ていわく我が父憲秀が命
と賜るに於ては一大事出来と告へし氏直堅く其約を
定し干時左馬介洞を晩て父憲秀が叛逆あるの事と告る
氏直大に驚て翌朝憲秀を召て北条陸奥守氏輝板部
江雲斎を以て憲秀が隠謀敵しを告る者あり其
否を糺明すへしとて憲秀頻て是敢諱て君と誰の
言ふなるんと詰次氏輝江雲が云く定て子左馬介が
と告る敵の誰訴に出るとそ云ふ此よ於て憲秀陣すり
処を一是に依て憲秀を禁獄し彼が役所に軍士を入
替へ堅く是と警衛次
十六日 池田輝政長岡忠興婿秀行等憲秀が約するか

時刻に至て兵を発して彼まち役前より城中に攻入んと欲兼て定むる旗の合図悪く匆に違ひ憲秀り隠謀露顕の役前に軍士を守らしめ城を攻むるを以て兵を収む

廿二日　井伊兵部少輔直政松平周防守康親小田原の城篠曲輪に攻入か兼日より重金場をして此曲輪と郭外とを穿ち忍び閉く城中に係入か次城中に兵用（堀入ル）前急に崩て要害の城壁倒れ城中の兵周章して直政康親十章と指揮して云く城中に返忠の者あり必利に乗て攻て城を陥んと進て凱を奏し城中に攻入り火を放（口言）に放て旗を挙の持口を棄て一所に集り拒ぎ戦ふ直政康親城より攻入ると云へ後援の兵なく心ならず城中より軍を返す迫藤登之助（年時十七歳）城中に攻入るの時城兵小屋甚助（内）を討く其首を得て向坂傳蔵芸に進て首級を得たり小林勝之助城兵小幡の士と鑓を合せ疵を被ふ年時小林鑓を突折る味方の兵城中より軍を退くの時小林勇て殊に闘夜雨風甚しくて殿を震て殿を其夜雨風甚しく闘夜雨風甚しくて

て寄らの陣を襲い討の虚に乗りて陣中狼狽して
伍を乱すを手時松平多数今家忠其陣乱るゝ処静也
是に依て永忠能く軍動の子細を図て敵働篠曲淪に
當て砦図て放火の光当もと永忠従士をして堅く吾陣
と守らしめ大神実の御陣営に馳参して言て云く
今夜の物忽次歌の夜討に歩ると篠曲淪の中に當て
砦図へ放火の光見ゆ内應の者ありて約束の烟と聲あり
又味方の兵今夜風雨の時に乗して働中に攻入るとも
云へ云味方の後援なきに依て敵外より是を告けさらんや
為メ砦と称し火を放つ是二事して他なきの旨を述ス
是に依て陣中の騒動鎮也 大神実乃永忠を召て命ありて
曰く旗下の陣各伍を乱すの時永忠其整て静なり剰
万卒固章の時命家忠能く其の子細を図て速に乞永忠乃忠なる
違ふと故に陣中の者忽静なり事を大ら実称しもの
其能く明察すると
廿三日 大神実向坂傳蔵近藤登之助二人を召て前
夜の戦功を賞せらる秀吉又向坂近藤両輩を営内
に招て近藤登之助に馬（南部黒）胴服（紅裏）と授向坂傳蔵に
も其に良馬を与ふ
一、前田利家上杉景勝岡左八月の軍働を聞ゝ

囲に震い降参の兵を并て五万余騎と号して小田原に
於て陣を布き秀吉に敵ふ秀吉の義感微少なる利家京勝
旦つ恨旦つ怨む者疫疾の次てに迫習の兵に謂て云く今度
利家京勝つ軍功最も大なる甚だ恥りと云ふ其叢蔟を抜て営塁
多和後と一揆の守兵とを屠り滅し悉く殺さん一宵一城
の法と謂つべし然らは我等くを賞ん利家京勝を
倒して先ず海内の兵を率して八王寺の城を攻むるか紫
小多陸奥守氏繁つ居城也氏繁八王寺小田原の城かりて援
地監物とりて八王寺の本城を守るべし免将野一揆なひ
中山勘解由石黒門内と中の丸を守るべし近藤出羽
守山中の陣と守るべし降人大道寺駿河守難波田弾正守
本宮丹波守金子紀伊守山田伊賀守等進て山下の陣
を攻む近藤出羽守奪戦て死次利家京勝立ちと率
して中の丸を攻む将卒一揆中山勘解由石黒門内拒ぎ
戦ひ本城に入て遂に自殺す横地監物本城を棄て逃ん
其後丈大将将野中山つ忠死を聞かりて将卒一揆つ子ら膳
ご中山勘解由石黒門内つ助六郎を召て麾下に属次
並山の城八北条美濃守氏規を守るか福嶋右馬允
丈ご剖蜂須賀阿波守永改長岡越中守忠興蒲生
飛弾守氏郷中川藤兵衛内秀改森右近重定忠改小
屋信雄の軍勢等を倒て攻討とも城兵堅く拒

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

江辛て城陥ちると城立小笠原十郎左衛門尉横井越前
守等城中より里十八町口に出張して
て追撃其後宵よりの法将等相議して此城攻陥
陥り難しと謂て柵と結い遠く囲て日と経ふか
大神君の士小笠原丹波守と秀吉使とを
故に小笠原並山の城の攻よに加て在り宵よりの軍勢
遠く城を囲て攻しか事と横篠と小笠原真應寺の事
と怒て法華の勇気と励んり為メに小笠原父子僅に微
城と辛して城よ攻入り利と得ると雖も後援なきに
依て小笠原父子奪戦て遂に死沢汲よして

大神君使と並山の城よ赴ふ史竊よ民親並戸沢民親
此旨に應して並山の城を以て大神君の臣内藤三左
衛門成信に譲け渡を小田原に赴て大神君の御
陣営に候と秀吉新庄新三郎石川兵藏をして並山
乃城を守らしむ

秀吉小寺如水羽柴下総守勝雄を遣して小田原の城
中に告て云く民政民也吾陣よ来り降らは伊豆相
模両国を与へ小栗安房守を逢沢民政ふ云く吾
久しく列を領を今僅に二列を領んるは戦ひ死ん
にハ不如を謂く敢て和と許ふ沢安房守強て諫ふか

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

一と悟へ玄氏改遂よ聽うも

家忠日記追加巻之十二　自天正十八年七月
天正十八年庚寅　至同十九年十二月

七月大

五日小田原ゟ城ゟ大ゟ風ゟ遁て際ゟ事敗と扈て
自氏直謀叛人松田憲秀と数ゟ
諫訪訪宗右衛門尉と幸ゟ　大神君命ゟ
来ゟ和ゟ乞　大神君命ゟ
称ゟる処ゟ其郎ゟ羽柴下總守と岩く
秀吉ゟ有違れ御旨ゟ無ゟ氏直刈鎗雅ゟ陣
よ出ゟ倘ゟ田我今秀吉ゟ降ゟ先ゟ全く
德一ゟ有ゟ又氏政ゟ下れ出ゟ降ゟ命

を助けい明日必城を可去勝雅等を秀吉は達秀吉
等を説き氏直悦ふく城より陣を
柳原武敬を補康政秀吉を信孫
斤相東市正直憲をして小田原
七日此日より九日まで小田原れ
て城より落ち不れ兵をまとめて悉く陣中へ引
孫坂安治斤相直盛等を遣して味方となれ籠
を制して　九日小宗氏政其弟氏
移り秀吉之曰今度吾東約
撃亡さんがため然ふ今悉皆と宥
氏政氏輝と勧ふく氏直を勧さんと欲れ由　大神君よ

議　大神君是を諾し玉ふ　十日
移り玉ふ　十一日氏政氏輝兄弟田村安栖が宅
自害を命きよ定り依て秀吉石川
蒲生氏郷　大神君之命を奉ふく石川中村が秀吉れ旨を述んと
湯水れ喉を乞い氏政氏輝永歌
北条美濃守氏輝（下時五十二歳）
自害をんと欲検使れ役人を制
童山角半太郎氏輝之首と懐取
驚ふく皆之を奪ひ返さ来幼稚れ侍童其志神妙之

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

と法人心狩に落ち果てと感も山角ら所為　大神君乃
台聴ら達し彼ら志ら感称し多く慶不ら尚
も武州多西郷開戸ら郷に於く合邑千石ら地を場
民政民輝兄牙れ首ら持く来ら秀吉ら室按ら入ら
秀吉曰ら　帝命ら畏さり老也別ら石田治部少輔三成
ら命ら洛ら上ら一條及捨ら秀吉来ら　十二日秀吉来
民亜そして高野山ら赴しめ小来妻隈ら民投小来
右衛ら支民勝松田左馬介山上ら於右衛ら尉大慶ら寺
孫九郎内義左近将監支証防部宗七郎
ホ三十人ら後ら老三百人同く赴秀吉悉意ら加
ら民直ら百人扶持ら場ら其後秀吉山上ら寒ら帰ら民直
を天野ら移ら暗年三月ら野ら

泉堺興應寺ら移り高后ら守申年又移別
于時秀吉河別ら於て事地一萬石ら民直ら與ら
ら于時
三十歳　十三日秀吉小田原ら城ら入ら
いく　大神君ら進ら　此日秀吉関尼八別ら
石領開ら地ら四日市場白領架中泉清ら寺各千石ら
ら千石ら領しも其以下諸将ら商ら割與ら
及北伊勢五郡ら中納言秀次三別ら　吉田ら城食邑十五万
石池田三左衛尉輝政三別国尚ら　岡崎ら
備長政遠別濱松ら城食邑十二萬石垣尾帯刀吉晴
遠別縣川ら城邑五萬石山内但馬守一豊遠別横須賀
ら城渡邊右衛佐務河国中村式部少輔一氏甲斐ら国
お為遠江ら信別小諸ら城食邑五萬石仙石権兵衛尉

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

信州伊奈郡毛利河門之秀頼信州祢科郡日根
城被攻之吉小豆原を石川出雲守初名伯耆守秀吉
心呂信雄を出羽秋田に遠流をも
むけ旨疑深くよ信雄虎狼の志を挿
き不予よ旨文禄元年三韓征伐と云て秀吉西国名屋よ勢ひ帰洛ま次て
野五郎右衛門を以秀吉 大神君に語て
貢として先予其子仙千代を大坂よ移し其忠を
盡仙千代を三引よ呼下を先我意ま次出て秀吉と
来行ま時三引居ま城よ籠ま旨如為遠行をして再三言と
遁よ先よ不従為よ我意を振回を無ま信雄
有事不忘ま旨秀吉ま先く先以懇ひ 大神君一旦秀吉
の憤を止玉ふ為よ小井戸ま郷よ移さ
之ま会色三千石を与く勢ま次て上洛ま次遁よ此所よ死ま故郡
関江雪斎勇よ志く忠よ厚く秀吉ま
を長野よ処を改く秀吉の慶も下ま厚ク 十四日秀吉
小田原と発く東引よ赴く 十五日秀吉武引江戸よ
ま 大慶寺逢河ま心家ま取ま舊臣
を遣ま 引利家景勝ま先陣よ切り松城ま郷導と
ま 甚深く依く江戸ま櫻田ま於
秀吉先以敬ま罪多きよ依く宮こま玉ま時 大神君と
臣本多中務を補忠勝を招く四一ツ以忠勝ま

一日　大神君兵を率ゐ武州江戸に（関東ノ国ノ名）入国ありて江戸の城は遠山右馬佐景政を
案内として小田原北條の城を乗取らしめ其外川村兵部景政
をして江戸の城を守らしむ遠山丹波守景政及真田
信伊の二人志を　大神君に通じ
城を移すの条門者をして　台命に先んぜざる
北條に属し川村兵部景政の後土木を江戸北
城を退出して　大神君北條討滅の事を聞
より遠山丹波守真田信伊加場千石舊領合
く一等石を場所遠山真田此功に譲ると雖も其の場北條の事を恨
江戸を去る浴よより秀吉の高を以

秀吉謂ふ曰此度信伊の胃勇
ふ敵なるを以今此胃可賞士を撰ミ
ミて忠勝ふ勇敢を大に美称し
北條武つれ西国に忠儀耐ふ家宝と
伐る　成田下総ふ小田原北城中
通ふ軍功を励ふんと欲ふてなり通謀疑敵して其約
違ふよ依ふ秀吉ふ怒ふ成田ふ所領を没ふ
秀吉野州小山自ふ帰ふ時成田ふ娘を召ふ
ふ妃妾愛ふ彼姫又れ成田ふ今色ふ事を驚き
許ふ秀吉ふ許ふ鳥山一等貫ふ地を成田ふ
與ふ

秀吉回開た八別れ士、大神君を招揮〻〻我心を仕すし渡く敢く不
許信を慮山真田進若れ分と成く為方々〻僧に蒲生氏郷を廣へ
籠城れ分沿う信く名多把二萬石を断ら
真田い大神之を召返す九合色五千石と為り十五日秀吉長国
城中る忠興を志く會津よ拾志
若政事〻〻い老よ徒人若恩賞大さい絶小國と
ニ氏西國よ拓んと結ふ秀吉ハ
門大沼毋積二本松五郡四千二万石を木村伊勢守父子
氏郷に與ふ葛西大崎三十万石を木村伊勢守父子
ま場伊葦正宗よ本把羽別長井郡米沢三千万
石を場る九日秀吉帰路よ走国中慶牧貴
牧を知人う為沸野淳正長政石田治部少輔三成大谷
形部少輔吉継を当く奥別を検地ま

地を御家人よ場ふ上別真幡城米地十二萬石
井伊ニ於ふ輔直政直政後ニ大神君の命を奉て両国
国小多衣城米地十萬石本多中務ニ蒲忠勝上
別館林城当樂勢田城両郡具外野別梁田郡
城門米地十萬石柿原武部ニ蒲蒲家政相別小田原
乃城米地四萬石後五千石加賜大久保七郎右衛門尉忠世
下総国矢作城米地四萬石鳥居彦右衛門尉元
忠上別厩橋城米地三萬石平岩主平親吉上
別藤岡城米地三萬石松平新六郎康元
上別碓氷城米地三萬石酒井宮内太輔家次上
野国久留里城米地三萬石大須賀五郎左衛門

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

尉康高上州宮崎采地二萬石奏年表作ち信昌上
州嶺岸地二萬石川だち二萬石大史康通後号ちつるとて下総
國古河城采地二萬石小笠原信濃守秀政上州
白井ル采地二萬石本多孝上州惣吉
采地二萬石牧野右馬允康成上州吉井采地二萬
石菅沼小大德下総國関宿ル城采地二萬石松平
三郎大夫康元後国備ち武州忍ル城采地二萬石内藤弥
国伯ち康重上総國佐貫ル城采地二萬石内藤弥
次右衛門尉家長武州岩付ル城采地二萬石ち口河内
守法長上總下總ル内采地二萬五千石国部門猛忠
長盛武州忍ル城采地二萬石松平主殿父家忠
武州川越ル城采地一萬石酒井河内守重忠武州
阿布采地一萬石菅沼新八郎定盈後号久敷設ち下総國の
内采地一萬石ち千石久野三郎右馬尉家能武州東
方采地一萬石松平丹波ち康長上州那波采地一万
石松平和泉ち康下総國北内采地一萬石保科
甚四郎正光後号久紀伊ち武州八幡山采地一萬石松平
主殿正清ち上州松山采地一萬石松平
下総國古河采地一萬石菅沼山城守定政後改ち
上州並山ル城采地一萬石内藤三左衛門尉信成武州

深谷采地一萬石松平深七郎武列
播磨守補信濃守右列玉乃脇采地一
下総国佐倉領采地一萬石三浦監物下総國豆戸
采地一萬石木曽千三郎武列川越領北門采地五
千石酒井右三馬大史忠世上列布川采地五千石
松平勘四郎信一豆列梅縄采地五千石川目内
藤成次郎采地五千石
石戸采地五千石牧野備後守上総国武列伊勢
千石大久保治右馬頭忠隣上列北川五千石雲尾能登守
吉次右列武列佐列北門采地五千石三浦
清庵采地五千石
藤四郎右馬頭厨正成

上列三ノ蔵采地五千石松平五左馬頭厨正下総国
佐倉領五千石山本勘右武列志久間雅井采地五千石
戸田左門一西下総國佐倉領采地五千石本多縫殿
武列見笑庵采地五千石三宅忠右馬頭厨康貞武列
采地五千石三宅治次三野尉正貞武列乃門采地五千
石永井右近大夫直勝上総國五井采地五千石松平
伝伊与守信相列中郡采地五千石青山善隆忠成
武列北門采地五千石神谷治右衛門相列武蔵守
五千石門奴弥三郎正成後は弥兵衛と改て武列高蒲采地五千
石柴田七九郎一豆列下田采地五千石戸田三郎右馬頭厨豊
下総國小弓采地五千石西郷孫九郎家貞後淳正と改 武列

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

川越領采地三千石酒井典七郎忠利（後伯耆守）武列礼羽
采地三千石設樂甚三郎貞元上総國小井戸采地三
千石本多作左衛門尉重次上総國勝浦三千石杜村
左近守春忠下総小南采地三千石杉平三郎四郎
定勝（後号源次）上列新川相原采地三千石稲垣平右衛門
長茂（長成号宗右衛門大神君北庭下ヨリ宗右衛門ト改ム）采地三千石濃
守藏下総國飯沼采地二千石杉平外記伊昌上総國
山口村武列稲毛肇北ノ采地二千石蜂門吉太郎
利之（後号主馬）武列北門采地千石高木吉次郎正次
（後ニ主馬ト改ム）

九月大

一日秀吉洛陽ニ凱樂

十月小

奥列葛西大崎ヲ征ス一揆蜂起シテ其ノ城ヲ攻ム
葛西ノ立城其子浦一右衛門尉ハ大崎北城ヲ守
又子ヲ以テ境ヲ隔テ事ヲ傳ヘ伊勢ヲ
葛西ヲ救ヒ大崎ヲ逃キ添一七ヲ討ツ父大崎ヲ
攻ク葛西ヲ佐ク逢中ヲ父子ヲ和睦シ攻討
ス兩城北南ヲ塞ク木村父子ヲ和睦シ攻討
奮戰ク氣ヲ拒ト雖一揆蜂起ク鎮ル攻ル
ル男木村ヲ氣狼狽シテ雜敷ヲ伊勢ヲ援士等合
平ヲ勇剛ヲ百ヲ佐沼ヲ城ハ境ヲ依ク米村

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

父子僅よ免れ佐沼城へ入て
よ大勢佐沼城を圍む城中防ぐ
圍ぬ　廿二日木村父子僅よ
一揆ども勢に伐圍む城中危急
風聞あり民郷宇こゝ伐侍し
伐こゝ軍伐勢て木村ゝ難伐
廿六日佐沼一揆必定れ由急伐
軍伐佐沼よ發ち欲こゝ
開萬次來蒲生小倉忠右衛門父子
會津よ向こゝ城伐ゝ民郷
一揆蜂起れ由伐　大神兵ゝ
ゝ浦生伐てしと援兵伐
ゝ会津よ通ぬ
十一月廿
一日民郷三千餘騎
釈ゝ保土乃伐堰こゝ會津よ
三十里八馬ゝ通ぬ
雪て降ゝしめ牧荒代ゝ
高ゝ伐こゝ師兵ゝ
領内二本松ゝ
飯塚ゝ城ゝ
福島ゝ

九日民郷

二日木村父子僅よ
一揆ども勢に伐圍む城中
圍ぬ　廿二日木村父子僅よ
一揆ども勢に伐圍む城中危急
風聞あり民郷宇こゝ伐侍し
伐こゝ軍伐勢て木村ゝ難伐
廿六日佐沼一揆必定れ由急伐
軍伐佐沼よ發ち欲こゝ
開萬次來蒲生小倉忠右衛門父子
會津よ向こゝ城伐ゝ民郷
一揆蜂起れ由伐　大神兵ゝ
ゝ浦生伐てしと援兵伐
ゝ会津よ通ぬ

十一月廿

一日民郷三千餘騎
釈ゝ保土乃伐堰こゝ會津よ
三十里八馬ゝ通ぬ
雪て降ゝしめ牧荒代ゝ
高ゝ伐こゝ師兵ゝ
領内二本松ゝ
飯塚ゝ城ゝ
福島ゝ

六日
七日民郷正宗ゝ
伐こゝ仙太郎
伐こゝ田本木
伐こゝ正宗ゝ

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

仍一揆共ニ而通ス氏官此所ニ
氏郷ニ仍推寄ク進ク二本松
城下ニ着氏郷使仍正宗ノ陣ニ
ヲ為遣ス氏郷伯父仍祝正宗ニ
ちんを御礼ヲ仍祝正宗ニ
ク軍仍出テ

十七日氏郷ノ
正宗ヲ来会ス〻ク軍ヲ催シ
明日ヨリ既敵地ニ入ル我敵ヲ
葛西大崎ヲ同ニ一揆ヲ不ル
うえ二正宗ニ云ニハ仍祝
ニ国ヲ

十八日

ヲ聞一揆ヲ城ヲ
民郷ヨリ〻ク
ク後仍祝ヲ城ヲ
黎明氏郷正宗軍ヲ
ヲ迎郷ヨ
両城ヨ一揆ヲ
多勢ニ

三拾里ニ満ル此一城ヲ

一揆ヲ城ヲ

氏郷ヨリ〻ク

ヲ一揆ヲ

十八日

氏郷正宗軍ヲ

ヲ敵ヲ

氏郷ヨリ

ヲ間中ヨリ

氏郷ヲ

ヲ陣ニ正宗ヲ

ヲ氏郷ヲ

ヲ陣ヲ

ヲ城ヲ

民卿軍中ヨ相使シ其歓ヲ以テ前ト
ス民卿ノ陣ヨリ今ヤ云我國ヨ病病ヨリ今秋ノ当
馬ヲ追ヒ命ヲ捨テ君ヲ皆ス民卿若シ国君下ノ
当ヲヲ以テ歓ヲ以テ軍ヲ出シ城ヲ抜
ヲ以テ得ク事ヲ鈴ヲ以テ時ヲ
決ス幸ニ作ヲヲ以テ正宗病ヲ称ス軍
ヲ出ス民卿ノ軍士ヲ以テ退ケ地利ヲ知ル作ヲ
黎明ヨリ攻ク軍ヲ以テ一陣ヲ
ヲシ十九日早旦民卿軍ヲ
原左ノ尉蒲生忠右衛門尉二陣ヲ
町中ヲ三命後陣ヲ命忠五命ヲ
ル民卿ヲ以テ正宗病ヲ称

ル民卿ヲ以テ疑ク軍忠無命ヲ以テ正宗ヲ
陣ヲ抜ヲヲ以テ水ヲ越其外ヲ一揆ヲ城ヲ
由正宗ヲ以テ病シ民卿ヲ以テ
記ス一揆ヲ云名ヲ城ヲ不言ヲ越ク民卿ヲ
ヲ陣ヲ云ヲ蒲生原左ノ尉ヲ奮戦ヲ一揆ヲ云
右翔ヲ城ヲ退入ヲ原左ノ尉備ヲ追ク
城ヲ攻討ヲ三ヲ九ヲ攻ヲ民卿後陣ヨリ
ヲ民卿ヲ退ヲ地自ヲ以テ士卒ヲ指揮シテ城
ヲ攻討シ別時ヨ本城ヲ陥シ城ヲ五百八十余人ヲ
殺ヲ称シテ民卿ノ従士遠家孫次郎栗井ヲ
尉町ヲ新ニ清尉田井ヲ以テ以テ我死ヲ民卿ノ指揮

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

忠五帝伍以参陣以呈一して正宗う拵攻拒く
正宗和平して城く拵んと欲く進こ来っていくとも
城既く防り扇う陣呈一して正宗の方ろう攻
て民郷う武意以感て民郷う陣以た北野よ先も
一接北忽法ホ民郷う勇敢以攻やく恐れ怖し吉川
わ山れ両城号以弁く逃くこれ正宗使以して
民郷よ降く曰我物よ依く名せ北城以攻を新
北竹も城以攻を新ら曰京都北
竹ら恐怖まれ京都よ達し其罪
を可喰北方以迷う其釈を北朝よみて正宗征士

須田個死り為蒲生源左衛尉う陣よ馳来て正宗が
敗走以出う民郷北入以竹く後代北為人をして玉
れ使謀以歟ら事疑まう正宗彼以して君
以係ら志んして欲以知て其和睦以明を面も北
方て陽て源左衛尉をして法句を須田う吾亡父
輝宗正ホ父よ仕て忠以盡北一城北主てなり輝宗
二不拘北城よりて幸去て時我父祖死北連て幸れ
忠功とう又輝宗と死以出るまて其忠義最大ひこ
処る今我よあめて賞微せよ別以拘れ難士
よ混雑北方よ依く恨く憤以依て正宗
以敗く民郷よ扇く其恨以達せんて欲以依て

民卿気く敢く須田以招きて云ふ正宗う援保公而須田
語く曰七ん乍黒川よ於正宗来云ふ時保く民卿
以討んて欲て雖京卿れ咎以恐つく拒絶して不諾
一揆以依一所と為害よ蜂起せい民卿以攻
討于時一揆れこと約以定め正宗軍以後ようく
民卿以討滅一民卿一揆れみよ令以須れ由京都よ
於為せんて語とりても民卿れ害取ん倩を速よ免せ
れ城治伝と正宗諜以失れ由以先ち佐沼れ城郭
也ん一揆お民卿う後援以やうく其武威よ恐色圍攻
解て退散ぬて伝こ本村父子使以名生れ城よ遣
告子曰民卿れ武威よ恐く此城以圍れ賊徒等

悉く逃散ぬて伝之以死れ圍以免
んぬ以あんて佐沼れ城郭招書き
なる民卿使以伝こも一本村父子こ速よ城以降
民卿う陣よ来りかるきの方以説しも 廿二日民卿
軍士三百人以一て本村父子以在迎こと
民卿う退れ云て降て名生れ城よ到り民卿よ奉
して後話れ方以附ん民卿使以も正宗城と
宮澤れ城以攻事延引ぬて放火し
事以将ちんい民卿軍以囲く攻て刀時よ城以移
んぬて再三急以告ぐて雖正宗敢く
応ぬ京都れやう急以恐く一揆こ志以不通れ方以

陳ずる事故田正宗御通
收をこゝろ城よ向ゟ民郷い杜
ゟ一揆ゟ鎮め此ゟ志ゟ義等ニて京都ゟ令ゟ
待ル

十二月小

淺野淳正長政奥州ゟ信州ゟ検地ゟて向ゟ
ゟ赴ゟ處ゟ再奥州ゟ赴ゟ
即此環ゟ
大神君ゟ謁ゟ令ゟ何江戸ゟ
旬二ゟ
大神君ゟ奥州一揆御征伐ゟて
大神君ゟ軍ゟ出ル玉ゟ
松平主殿助忠ゟ
當ゟ
秀康ゟ
玉ゟ榊原式部康政先驅ゟ
難ゟ
本杜ゟ陣ゟ
ゟ
民郷ゟ陣ゟ
名生ゟ城ゟ

令ゟ
大神君三河ゟ
十一月中
ゟ
ゟ
ゟ

自殺す御ゝ奥州へ發向せんとせしに石田治部
少輔三成と謀して江戸より赴しめ
給ふゝ其ゝ内府公城和泉守伊奈由利柴田
等をも方々に說しむ廿九日 台徳院殿御
氣色悪ゝ此年濵井雅楽助宅にて
從五位下 台徳院殿御元服を
被遊ゝ 大神君より御名を
賜ふ

天正十九年辛卯正月大

一日奥州より一揆蜂起之由にて 台徳院殿御
受ゝ其次今日注進に城州伏見
より

大神君より御書を
賜ふ

二日濵井雅楽助宅にて

氏鄕柴村伝助等父子供奉ゝ
ゝ赴 五日奥州より一揆御征伐
被 城州伏見より御
後ゝ追々

大坂ゝ江戸へ御下向
相州早川ゝ着此日石田治部少輔三成相馬
手時奥州より一揆悉退治之
被由其告ゝ三成
十一日 大神君 台徳院殿御元服
御進發ゝ奥州より一揆
氏鄕ゝ悉退治ゝ悉平均ゝ
長政ゝ又帰洛ゝ赴被由注進ゝ

大神君更別若丸御逗留ニて 十三日
大神君定メ之通り江戸ニ城ニ帰御 十四日秀次武州
府中ニ到る乗換ニ御對顔ニ而府中ニ 大神君府中ニ
渡御ニ 十九日ニ着ニ九二日 大神君御上洛
ニ而田仲法士ニ 命セラル 廿二日 大神君今日ニ
御上洛ニ付御逗留ニ 仍テ法士ニ城ヲ而
きれ与 命ニ依テ悉ク城ヲ毀ス 大神君ニ御感ノ
大神ニ之場ニ

閏正月小

三日 大神君江戸ニ城御ニ達ニ 十日薗
ニ着ニ民部ニ入ニ 秀吉ニ時ニ秀吉ニ
曰今度更別ニ一揆蜂起シて佐渡ニ城ニ園ニ村等
新ニ乃ニ民部ニ武勇ニ佐渡ニ按ニ其新
ニ九更別ニ御ニ佐渡ニ城ニ園ニ村等
大ニ之ニ感称ニ 十五日 大神君御入洛

三月小

三日 大神君洛ニ出ニ江戸ニ城ニ着ニ
廿日ニ入ニ刻ニ 大神君京都ニ
城ニ還御

六月小

七日 大神君来月中旬更別若御逗留ニ
用ニ船ニ而ニ 命ニ依テ船ニ

両人両敵大将を生捕信直ハ臣九戸政実傍輩ゟ秀吉
江致ゝ信直ゟ不被召出浪人数千人を招集ゝ近国
江被指置ゟ立国ハ徒将等ゟ臣ゟ従ハ制ゟ事ハ不従
大神君奥州ゟ御進発ゟ而ゟ分ゝ松平之勢ゟ
大神君ゟ命ハ有ゝ思ハ城ゟ
廿日蒲生氏郷九戸退治ゟ
為陣ゟ啟ゟ

七月大

十日秀次奥州ゟ
十九日大神君御ゟ
廿日蒲生氏郷ゟ
二萬余騎ゟ六ハ事ゟ
大神君ゟ井伊ゟ
秀次ゟ堀尾帯刀吉晴ゟ
加ゟ一ゟ

九月小

一日氏郷ゟ
ゟ城完ゟ井ハ
ゟ
ゟ
ゟ

歌仙圍しめ一人も不漏さ皆切死究む井辺迄相撲
利を城より討て歌完む井辺を城攻破入て歌く其ころ三
万余の軍勢完む井辺を進撃る兵部卿
門院助奉り尉寺村を馬尉寺
新関上総介忠分ホ宣如何ぬて皆と戦ふ歌狂狼して撃
ホ其利よころく真ま九戸ら指城囲む九戸ま忠
囲ら柳ノ丸ま集ら城攻寄て九戸と一方ま集ら城
ら井伊直政ホ補真政民部と武勇双ひ進ら
戦しらま宣功記書ホ浅帯
吉時中村治部次ホ柳ひま心長政堀尾帯刀
つれ始ま攻く攻入ら城ら生ら指軍ホ不得
閑ま望くら有ま此日城代指軍
佐将城ら抗ま城ら没ら事千余級
窮ま出ホ原ホ長政ら陣
大将大丈信忠ニホ頭ホ為ら
陣落ま向し長政ま討て
九戸政実及柳ノ丸ま集ホ三北丸ま招出し軍士ホ
ろく堅く皆ホ城ら指方人ホ三北丸れ指ま
進上ケ火ホ放く皆ホ焼払ホ手時秀次三ノ迫ニ到着
長政九戸柳ノ等ホ携ら津ま赴ん
磐ま目将ホ命ホ不
ま降ま三北迫ま於九戸柳ノ等ホ

大神君より御届有之候ニ付、九戸御引払御代
御届ニ付、大神君より御届有之候ニ付、
此旨御届申上候、以上
十月廿六日　大神君
其日大神君より左之
大神君江戸より城へ御出勤
次第御届ニ付、頭取一揆
のゝ正宗今度思召を以御免
ニ付、其方儀も御免
相別れ井郷要別田村塩松伊達信夫刈田
民郷より編成之百姓
ニ編成致候ニ付、旧領
西宗より旧領
田村所ニ一揆
の家人山田八蔵尉
属ニ此企ニ出
ニ一揆共悪法等
民郷ニ領内静謐
法ニ候ニ付、此月
二万石ニ加
四万石ニ場
七屋惣兵衛忠直
民郷より編成之百姓
ニ編成致候ニ付、旧領
西宗より旧領
田村所ニ一揆
の家人山田八蔵尉
属ニ此企ニ出
ニ一揆共悪法等
民郷ニ領内静謐
法ニ候ニ付、此月
二万石ニ加
四万石ニ場
七屋惣兵衛忠直
相馬秋宮村

[illegible]
十一月大
大神君寄左八列寺社領之印状物
市原郡八幡宮之御自筆之物
寄進　八幡宮
上総國市原郡八幡宮郷門
百五十石
右如之令寄附之訖守此旨
弥可守之状如件
天正十九年　十一月日
上総國市原庄

八幡郷　そうちやう　まち
屋中まで　おい　庭中　村上
以上　ごたよ

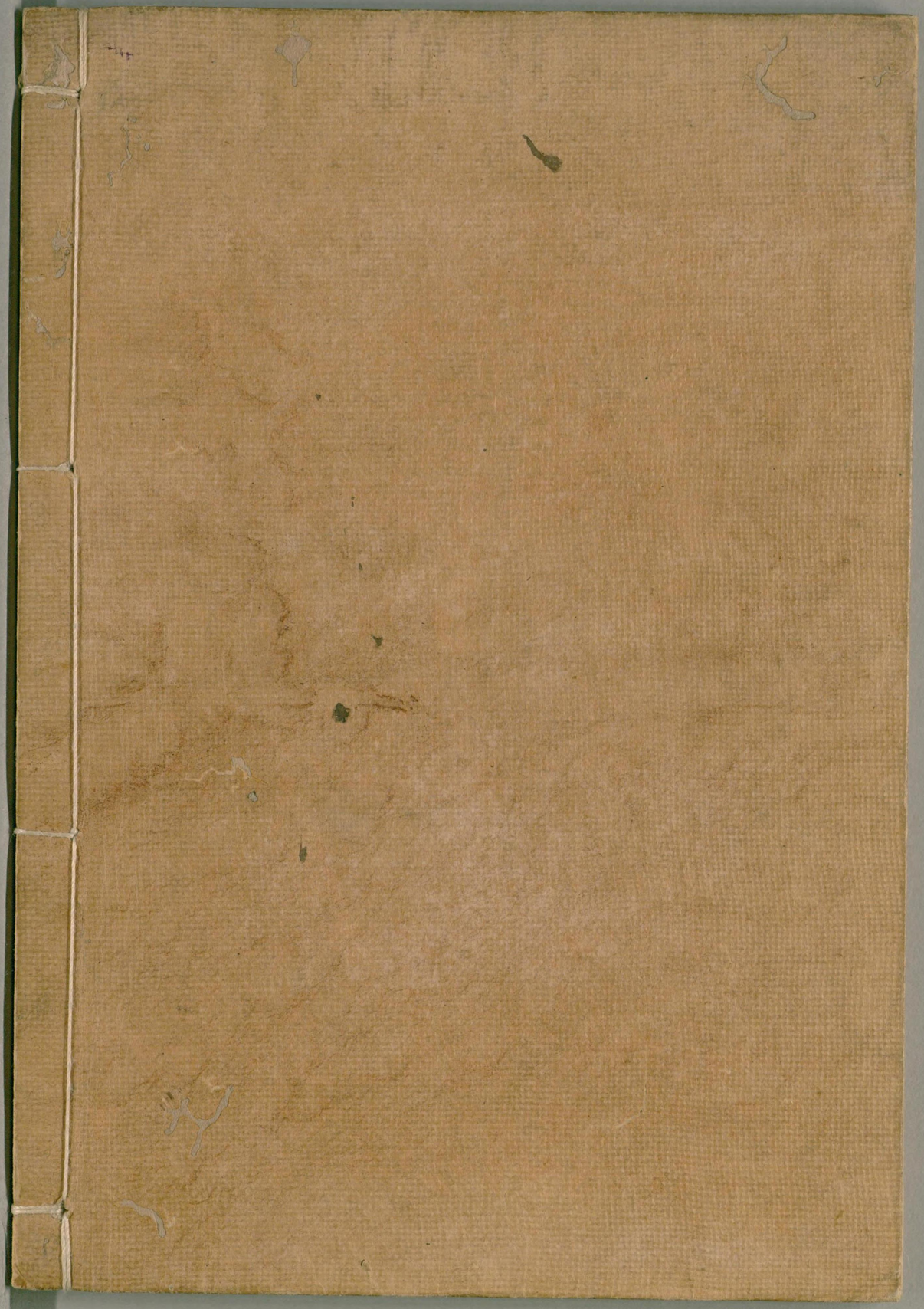
十二月小
世日秀吉俄之実白ニ而秀次之養
子ニ被成大閤ニ成

家忠日記追加書之　十二

838
12
87

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用